

第1章 草創期（1908年～1924年）

1節 日本における「神の教会運動」の一声

帰国した翌日の1908年（明治41年）3月28日、矢島宇吉師は家族と合流するため、千葉県松尾村にある彼の妻の実家へ向かった。

4月5日、彼はそこで最初の集会を開き、信仰義認についての説教をした。そして、4月から5月にかけて、在京の友人、親戚との交わりのなかで小集会を開き、信仰義認について語り、教会問題について語り、6月、東京都品川区大井町404番地に居を構え「神の教会運動」の一声をあげた。この時が「日本神の教会史」の第一頁を飾ることとなる。

1908年8月9日、矢島師は「純福音」誌創刊号3千部を発行した。「練馬神の教会50年史」の中で、矢島師の次男矢島敬二氏が記している「矢島宇吉の半世伝」で、矢島宇吉師の日記を紹介しているが、この日記によると、矢島師は、米国のバイヤー師宛に以下のように報告している。



1908年10月25日
大井町小公園にて
家族4人以外の
男性3人は不明

主の御名により御挨拶申し上げます。妻と私は、今も主の御救いに与っていることを喜んでおります。私共は敵の力に勝利を得つつ、福音のため最善の努力をつくしております。私共は大いなる業、真の福音の宣明をなすには、余りにも小さき者であることを感ずる者であります。しかも神はこれを我らになさしめんと望まれておることを信じています。故に、神のみが凡ての必要を充たし給うと神にお任せしております。神は現実に我らを助け給いつつあり、且つ、我々が真実と信仰とを保つ限り、変わることなく助け給うであります。

現在、日本人の間の最重要な問題は、我らの信仰の土台である聖書の高等批評に関することでもあります。我々は「聖書によって、ひとたび伝えられた信仰のために戦わねばなりません。これに関し、貴殿よりの御援助を有難く存ずる次第であります。」「純福音」(The Pure Gospel)の第1号は3千部印刷されました。よって本便によって、これを貴殿にお送り申し上げます。わずか四頁の小さいものです。印刷費は次のとおりであります。

- 一千部 九円 (4.50ドル)
 - 二千部 十三円 (6.50ドル)
 - 三千部 十七円 (8.50ドル)
- 郵便料金は第三種（米国では第三種）で
- 一千部 五円 (2.50ドル)
 - 二千部 十円 (5.00ドル)
 - 三千部 十五円 (7.50ドル)

何人の購読者が出るか分かりません。神が純福音の伝播のために、この雑誌を用い給わんことを祈っております。創刊の辞は次の通りであります。

「現代のいわゆるキリスト教会の実状は混乱そのものです。幾多の信仰個条と分派があり、嫉妬と争いがあります。かかる状態は、キリストの福音とは全く異質のものであります。敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、このたぐいのものは肉の業であります。（御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であります。）—ガラテヤ書5章22、23。」

「私たちが敵の手から救い出し、生きている限り、きよく正しく、みまえに恐れなく仕えさせてくださるのは、キリストの福音のみであり—ルカ伝1章74、75—そして、不信心とこの世の情欲とを捨てて、慎みふかく正しく、信心深くこの世で生活し—テトス書2章12—召されたその召しにふさわしく歩き、できる限り謙虚で、かつ柔和であり、寛容を示し、愛をもって互いに忍びあい、平和のきずなで結ばれて、聖霊による一致を守り続けるように努め—エペソ書4章1～3—むなしいだましごとの哲学で、キリストに従わず、世のもろもろの靈力に従う人間の言伝えに従い—コロサイ書2章8—作り話は、信仰による神の務を果たすものではなく、むしろ論議を引き起こさせるだけのものであり人に益とならない。—テモテ前書1章4—」

「我々は、この雑誌を出版するに当りこれが、小さいものであるが、主の助けにより、純福音を宣明し、人々を信仰と救いに導くに至らんとする希望は大なるものであります。」

この他に掲載した文は次の三つ、即ち

真の宗教改革
救世軍の一志官へ
福音の力

であります。

この第1号「純福音」を、矢島宇吉師は、米国のバイヤズー師、クローズ師、バイラム師、ハンネックス師（中国への宣教師）の4人に送っている。

当時、米国の神の教会は、伝道のため「ゴスペル・トランペット」（Gospel Trumpet）という機関紙を発行しており、これにより、矢島師は神の教会を知り、救われるに至ったのであるが、日本に帰ってから、それと同名の日本語「福音のラッパ」を用いずに、「純福音」とした理由をバイヤー師に説明した記事が、日記に記されている。それによると、「福音のラッパ」とすると、日本では、やや自己誇張的に響くので、純福音（Pure Gospel）とする、と記されている。

矢島宇吉師は1908年10月27日から日曜学校用にもう一軒の家を借り始めた。矢島敬二氏は、その日12人の子供たちが日曜学校に来たと述べている。その日の午後には最初の大人向けの集會がもたれた。3人がこれに参加し、矢島師は「単純なる救いの道」という題で説教した。

矢島敬二氏は、また、矢島宇吉師が鉄道の各駅で駅長に会い、駅に「純福音」を備え付ける許可を得、日比谷や上野図書館からも同様の許可を得たと述べている。矢島師はゴスペル・トランペット誌に、新しい家では毎日曜日に2つの集會が持たれ、見通しは非常に明るいと報告している。

（参考文献 練馬神の教会40年史、50年史）

2節 米国宣教師来日と伝道活動(大井町、武蔵境より本郷へ)

米国神の教会のミッショナリー・ボードはこの矢島師の伝道を助けるべく翌1909年にW・G・&ジョシー・アレキサンダー師夫妻並びに前記ハッチ師夫妻の2組の宣教師を日本に送り、これらの人々が、一団となって伝道に当った。

「純福音」誌による筆戦も華々しく、日本各地に配られ、ここに説かれた神の教会の真理に呼応してくる人も少なくはなかった。前川忠次郎元高円寺神の教会牧師もその一人で、他派から転じて来られた。当時既に聴覚の不自由であった矢島師を助けて主として宣教師たちの通訳の任に当られた。元拝島神の教会牧師岩城昌一師、後年、本郷神の教会牧師として短期間その任に当られ召天された松本学師もこの初期の強力な共働者であった。

集会は、元芝の伝道所から、同じ大井町の仙台坂に移され、さらに後、都下武蔵境への移転となった。この武蔵境への移転には、当時盛んに刊行されていた「純福音」誌の印刷所設置という目的もあった。ここは3千余坪の広大な地域で、この中に、日本人館、宣教師館、また、印刷所、農場等も設置され、アレキサンダー師が主としてその経営に当った。内外人共すべて伝道者はここに集まったが、ハッチ師は、その後、市内麻布一の橋に出て、前川師の助けによって市中伝道を開始した。しかし、この後、芝、田村町に移られたが数年にして、ハッチ師は病を得て帰米され間もなく召天された。



1909年6月6日、東京府南品川仙台坂上神の教会会堂前にて撮影、後列右から4人目が矢島宇吉師、アレキサンダー師夫妻、ハッチ師夫妻の姿もみえる

都下武蔵境の地に広大な土地が与えられ、諸設備も整えられていたが、何分にも都心から遠く伝道の中心地としては不便であった。1917年(大正6年)米国神の教会ミッショナリー・ボードは、東京本郷現本郷追分町の地に、敷地80坪、建坪80余坪の一建物を購入、これを日本における神の教会伝道の本拠と定めた。

米国のミッショナリー・ボードは次々に下記宣教師を送った。

ズダ・チェンバース師 (1917年～1922年)

ジョン&パール・クロース師夫妻 (1920年～1921年)

グレース・アレキサンダー師 (1922年～1924年)

アクシー・ボライソ師 (1921年～1926年)

アダム・W&グレースミラー師夫妻 (1922年～1927年)

これらの宣教師は、全員本郷神の教会の会堂に住み、矢島師達と協力して伝道に専心した。

1920年、W・G・&ジョシー・アレキサンダー師夫妻は、約10年の聖業をおえて帰国した。武蔵境の伝道はそれと共に終わり、本郷は名実共に日本における神の教会の中心となった。矢島宇吉師が初代牧師である。

内外教役者が1カ所に集中伝道することは、これまでの伝道的方針であったが、ミラー師、ボライソ師時代に入ると各地分散伝道の方針に転じ、その為の経費はミラー師たちが教鞭をとり、その収入によって賄われた。かくして新しく生まれたのが、矢島師による練馬教会(現、練馬神の教会)、ボライソ師による西ヶ原教会、ミラー師による宮仲神の教会(現、教団戸山教会)の伝道所である。